

『主イエスの中で生きよ』 (要旨)
聖書箇所：ヨハネの福音書15章4節

【1】わたしにとどまりなさい

主イエスは、ご自分と信仰者の関係を、ぶどうの木と枝にたとえました。今日の箇所で、ぶどうの木であるイエスにとどまるようにと教えられています。

ヨハネの福音書15章1節~10節は、「とどまる」という語が繰り返されています。主イエスは「わたしに」(4節)、「わたしのことばに」(7節)、そして「わたしの愛に」(9節)とどまるようにと言われました。

ここで言われている「とどまる」とはどういう意味でしょうか。鳥が木にとどまるような羽休めのことでしょうか。一定の期間イエスにとどまるという非日常を経験することでリフレッシュし、自分の日常に戻るという意味でしょうか。ここでは常に結びつくという意味で「とどまる」という言葉が使われています。主イエスは「わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります」(4a)と言われました。

ぶどうの木と枝は樹液、すなわち命が通っており、互いに結びついています。それは永続的で生命的な関係です。したがって「わたしにとどまりなさい」とは、信仰者が日常で主イエスと一緒に生きることを意味します。すなわち私たちが毎日直面する出来事において、みことばと祈りによって、イエスとともに物事と向き合い、考え、導きを求めることです。イエスはその理由を次のように述べます。「枝がぶどうの木にとどまっていなければ、自分では実を結ぶことができないのと同じように、あなたがたもわたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。」(4b)

当然、枝は枝だけでは実を結ぶことはできません(参照:ヨハネ15:5b~6)。どんなに良い品種のぶどうの枝であっても、木から離された状態では実を結ぶことができないのです。

▷信仰者が実を結ぶために必要なことは、ぶどうの木である主イエスにとどまることです。そして断続的ではなく絶えず、「わたし(イエス)に」、「わたしのことばに」、そして「わたしの愛に」とどまるようにとされています。

【2】受けた恵みを忘れることのないように

信仰者は主イエスを救い主として受け入れ信じた時に、神を「主」として歩む決心をしました。しかし私たちは、主イエスにとどまる熱心さにおいて冷めやすい性質を持っています。「主イエスとともに歩もう!」と決心した後、しばらくすると、全く別の方向に向かっているということはないでしょうか?

J.カルヴァンは今日の箇所を「キリストは、ふたたび彼らに、すでにうけた恵みを維持することに熱心で、注意深くあるようにすすめている」(『カルヴァン新約聖書註解』新教出版社、488頁)と述べます。主イエスはどんなに大きな決心をしても目の前の課題や問題に目が行き沈み込んでしまう、そんな私たちの性質を知っておられるゆえに、次のようにも語っておられました。

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。」(ヨハネ6:56) これは主イエスが制定された聖餐式に関する教えです。私たちの立派な信仰ゆえに聖餐式が執り行われているではありません。むしろ受けた恵みを簡単に忘れやすい者たちであるゆえに、私たちがイエスのうちにとどまり、イエスが私たちのうちにとどまることを聖餐の度に思い起こすのです。

【3】主イエスの中で生きよ

主イエスに「とどまる」ことは、主イエスを「住まいとする」、主イエスの中で「生きる」、あるいは「生活する」と訳すこともできます(参照:BDAG)。

クリスマスにお生まれ下さった主イエスは「インマヌエル」(『神が私たちとともにおられる』)と呼ばれ、「世の終わりまで、いつもあなたがたとともに」(マタイ28:20)いてくださるお方です。

この一年の恵みを振り返り、来るべき年も「主イエスの中で生きよ」、豊かな実を結ぶことができますように。

